

ヴァージニア・ウルフ「サセックスの夕べ：車からのながめ」

A Translation of Virginia Woolf's "Evening over Sussex: Reflections in a Motor Car" (1927?) from *The Death of the Moth and Other Essays* (1942)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2014年9月30日受理

夕暮れはサセックス(訳注：地名)に優しい。だってサセックスはもう若くはないから。それに夜のとぼりが降りてくればそれだけでうれしいもの。ランプに覆いがかけられ、顔の輪郭が見えるだけ、となれば年老いた婦人が喜ぶように。サセックスの輪郭はなお美しい。崖が海にせり出している、ほら、つぎからつぎへと。イーストボーンもベックスヒルもセント・レナード(訳注：いずれもサセックス海辺の保養地)も、遊歩場、下宿屋、ビーズ細工の店、スイーツの店、それからポスター、傷病兵、遊覧バス、みんな見えなくなる。残ったものは、十世紀も前にウィリアム王がフランスからやってきたときにすでにあったものだけ。海へと駆け込んで行く崖の輪郭。草原も当時のままによみがえる。点々と海岸線沿いにつづく別荘の赤い屋根も黄昏というしじまの湖に洗われる。建物もその赤い色もだんだん飲み込まれて行くのだ。明かりを灯すにはまだ早い。星が瞬くにもまだ早い。

しかしこう思うのだ。こんなに一瞬／＼が美しいと、澱のようにいらいらが溜まってくるのだと。心理学者たちならこう説明するだろう。目を上げると、思いもよらないこの美しさにひとは圧倒されるからだ。バトル(訳注：Hastingsの戦いがあったところ。地名はその戦いに由来する)の空にはバラ色の雲がかかっている。草原にはまだら模様が、大理石模様が降りてきている。息を吹き込まれた風船玉のように、ひとの感受性も爆発する。それからすべてが、美、美、美で目一杯にまで膨らませられる。ピンで一刺し。崩壊。でもそのピンって何。まあ、たぶん、わたしたちの無力感に関係しているのだろう。それを捉えることはできない。言い表すこともできない。わたしはそれに打ち負かされるだけ。わたしは支配されるだけ。そういうところのどこかにわたしたちの不満が潜んでいる。それは経験するものすべてをわたしたちは支配したいという欲求をもっているということだったのだ。ここで言う支配というのは、自分が経験したことを別の人物にも味わってもらえるよう、サセックスで見たことを伝える力をその昔意味していた。さらに、もうひとつピンを一突

き。昔はせっかくの機会を無駄にしていた。だって美しい景色が右手にそれから左手に、それから後ろにも広がっていたからだ。美しいものはいつだってわたしたちの眼をすり抜けていったのだ。わたしたちの目は、浴槽をいや湖を満たす水の流れに指ぬき程度の大きさの詰め物ができるに過ぎない。

でも捨てなさいよ、わたしは言った(よく知られているように、こうした状況下では自己は分裂し、自己の半分は熱心に追い求めるあまり不満足をつのらせ、もう半分は厳格さを求め思索的になる)、こうした達成不可能な野望は捨てよ。目の前の景色に満足せよ。じっと座って身を任せるのが一番よい方策であるなら、わたしの言うことを信じよ。受け入れるのだ。受け止めよ。一頭の鯨の身体を切り刻む六本の小さなナイフを自然が与えたからといって思い悩むな。

どの道に行くべきかを、何が賢明かを、これらふたつの自我が教務会を開いて話し合っている間、わたし(こうしたことを口にする)第三の自我だ、わたしはこう言った。そんなに簡素な仕事をやれるなんて、お前たちはなんと幸せなこと。車が野を駆けているときその二つの自我はあらゆるものを目に留めてじっと座っていたのだ。干し草、赤さびた屋根、池、袋を背に家に戻る老人。そこに座っていたのだ。絵の具箱から空と大地の色を取り出し、合わせながら。暗い^{いちがっ}一月を照らしてくれる赤い光のなかに模型のように小さな納屋、農家をサセックスに建てながら。でもわたしにはいくぶん変わったところがあるので、気持を寄せずに、ふさぎ込んで座っていた。その二つがそういうふう^にに忙しくしているとき、わたしは思った。行ってしまった、行ってしまった。ずっと向こうへ、ずっと向こうへ。過ぎたこと、終わったこと、過ぎたこと、終わったこと。道をどんどん進むように、ずっと後ろに生命を置き忘れてきたようだ。わたしたちはサセックスの野を越えてきた。そしてもう先ほどいたところでは忘れ去られている。ほら、家々の窓がヘッドライトでほんのちよつとの間照らされる。灯りはもう消えた。他のものがわたしたちの後から来る。

すると四番目のわたしが(待ち構えている自己、見た目休眠状態、だしぬけに飛びかかってくる。そのことばはこれまで起きたことにはたいい関係がないけれど、その唐突さゆえに気をつけていなくてはならない)言った、「あれを見て」。光だった。きらきら、気まぐれで、説明できない光。ちょっとの間、わたしはそれが何だということと言えなかった。「星だ」。それからそのちょっとの間、星は妙に意外性の光を明滅させ、踊り、一条の光を出していた。「あなたの意味が分かるわ。」わたしは言った。「突飛で、衝動的なあなた、丘の上に現れる光が未来から落ちてきたものだということをお前は感じている。このことを理解しましょうよ。頭でわかりましょう。わたしは過去にではなく未来につながっていることを突然感じる。五百年先のサセックスのことを考える。雑なところがたくさん蒸散していくだろうと思う。なんでもが気化し、なくなってしまっただけでゆく。魔法の門がある。電力の風で家々は清められてゆく。強くきちんと統御された光が周りを照らしながら、地上をゆく。丘に動く光を見てごらん。それは車のヘッドライト。昼に夜に、サセックスは五百年も経てば、すてきな考えで、効果的な光線が力強く降り注ぐだろう」。

太陽は地平線にとくに沈んだ。闇が急速に広がる。わたしの自我たちには何も見えなかった。生け垣に当たったヘッドライトの細い光が見えるだけだ。それらを召喚して言う。「さあ、勘定書を書き上げる季節だ。わたしたちを集めなくてはならない。ひとつの自我にならなくてはならない。もうなにも見えなくなった。われわれの光が繰り返し見せてくれるくさび形に見える道と堤防以外には。わたしたちは完全に武装している。ぼろ布であっても暖かく包まれている。風と雨からは守られている。私たち以外には誰もいない。勘定の時だ。さあ、わたしはみなを座長役。持ち寄った戦

利品を順に並べることにしよう。今日はたくさんの美を持ち込んだ。農家、海に切り立つ崖、実りかけの畑地、まだら模様の畑地、赤い羽で掃いた空、そういうものみんな。なくなってしまうものもあり、死ぬ人もいた。消えてゆく道、ちょっとの合間光って暗くなる窓。それから明滅する光もあった。それは未来を照らしていた。」わたしは言った、「わたしたちが今日作り上げたものは、これだ。この美だ。個人の死、それから未来。見てごらん、あなたの満足のいくように小さな像を造ってあげよう。ほらやってきた。この小さな像は、熱い風が一吹きで家々を一掃してしまうとき、美の中を、死の中を、経済的で力強く効率的な未来へと進んでゆく。この小さな像にお前は満足するだろうか。見てごらん。ほらわたしの膝に載っている」。わたしたちは座り、その日に作り上げた像を見つめた。岩でできた大きな板、房状の木がその像を取り囲む。ちょっとの間、とてもまじめな顔つきだ。まるで物事の現実が敷物の上に展示されているかのようだ。ものすごい身震いがわたしたちの身体を駆け抜ける。電気の塊がわたしたちの中に入って来たようだ。わたしたちの自我は声を揃えて叫ぶ。「そうだ、そうだ」と。認知の瞬間になにかを断言するかのよう。

するとそれまで黙っていた肉体が歌を歌い始める。初めは、車輪が動き始めるときのように低い音で。「ベーコンエッグ、トーストとお茶、暖炉と風呂。暖炉と風呂。野ウサギのシチュー」。それから続けて「赤カラントのジェリー、ワインを一杯、その後に珈琲を。後で珈琲を一杯。そしてベッド、それからベッド」。

「もう行くのよ。」わたしは自分のそれまで一体となっていた自我たちに言った。「もう仕事は終わりよ。おしまいよ。お休み」。

すると旅の残りはこのわたしの肉体がうまい具合にまとまりあって演じられてゆくのだ。